

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 15 日現在

機関番号：12501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770061

研究課題名（和文）日本におけるスタニスラフスキーシステム受容の系譜

研究課題名（英文）The adaptation of Stanislavski's system in japan.

研究代表者

内田 健介（UCHIDA, Kensuke）

千葉大学・大学院人文社会科学研究科・特任研究員

研究者番号：80706911

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：世界の俳優教育の現場において、大きな影響力を持つ俳優教育方法「スタニスラフスキー・システム」がいかにして日本に導入されたのか、その歴史の見直しをすることで、その問題点を明らかにした。特に大きな成果として、一部で最初のシステムの指導者であったとされた小山内薫が、史料調査によりシステムではなく別の方法を用いていたことを明らかにできた。また、システムに関する文献の翻訳を通じて、使われている専門用語に関する分析結果を論文として発表し、実際の俳優に向けたレクチャーを開催し成果の波及に努めた。

研究成果の概要（英文）：The Stanislavski system is a major education method of actor training in the world. In this research, we studied how system introduced into Japan. Previous studies have argued that the Stanislavski system was introduced by Kaoru Osanai. However we have proved that it was wrong and Osanai used another method by survey of Osanai's historical materials. Also we translated the literature on early development of the Stanislavski system and analyzed the technical terms. We wrote the results in our paper and held lectures for actors and public.

研究分野：ロシア演劇

キーワード：日露演劇交流史研究 ロシア演劇研究 俳優教育研究 日本近代演劇研究

1. 研究開始当初の背景

ロシアの演出家であり名優、そして俳優教育方法に革命を起こしたコンスタンチン・スタニスラフスキー。彼の生誕 150 周年であった 2013 年(平成 25 年)には、ロシアの演劇雑誌においてスタニスラフスキーに関する特集が数多く組まれた。その中で大きなトピックとなったのが現在のロシア演劇界におけるシステムの位置についてであった。しかし、ソ連時代に社会主義リアリズムを押し進めるなかで教条化されてしまったシステムの歴史に触れることは現在のロシアの記事ですら避けられており、現在活動を続けている演出家や役者に対してのインタビューからシステムを考えることが中心となっていた。つまり、ロシアにおいて歴史的・演劇的な見地からスタニスラフスキーの死後、ソ連時代に行われたシステムを用いた教育に対して総合的な研究が行われる様子はまだ無い状態であった。

こうしたスタニスラフスキーシステムに対する分析や研究に関しては、本国ロシアにおいてよりもアメリカにおいての方が活発に行われている。2009 年には Sharon Carnicke の『Stanislavsky in focus』、2010 年には Mel Gordon の『Stanislavsky in America』などアメリカにおけるスタニスラフスキーシステムの歴史を総括しようとする著書が相次いで出版され、イギリスでも Jonathan Pitches の『Russians in Britain』の中でシステムの影響について論じられている。また、同じようにシステムを演劇教育に導入した中国でも 2003 年に陳世雄による『三角対話』が出版され、中国における俳優教育の研究のなかでシステムの受容について論じられている。

一方、日本においてはシステムの教科書とされたスタニスラフスキーの著書『俳優の仕事』が、完全な形でロシア語から翻訳されたのは 4 年前の 2009 年であった。明治以降の近代化が進む流れのなかで、演劇にも近代化の波が押し寄せ西洋のリアリズム演劇が輸入され、スタニスラフスキーと彼の所属していた劇場モスクワ芸術座は日本の演劇の近代化を進めようとした人々にとって常に手本であり目標であり続けた。それゆえ、スタニスラフスキーの俳優養成法であるシステムを手本に俳優教育が行われてきた。ところが、それまで日本におけるシステムの受容は原書であるロシア語ではなく、主に英語やドイツ語からの翻訳によるもので、その翻訳も著作全体に及ぶものではなかった。

また、スタニスラフスキーの俳優教育方法を初めて導入したとされる小山内薫が活動していた時代には『俳優の仕事』はまだスタニスラフスキーによって執筆される前であり、自伝『芸術における我が人生』のみが出版されていた時代であった。だが、そもそもスタニスラフスキーはシステムを 1912 年に構想してから時代を進めるごとに刷新し続

けていた。そのため、日本の演劇人がいつの時代のスタニスラフスキーからシステムを学んだのかによって、その中身は必然的に異なっている。そのため小山内を始めとした日本の演劇人がどのようにしてスタニスラフスキーのシステムの情報を入手したのかを明らかにしなければ、日本のシステムについて論じることなどできない。しかし、今のところ彼らの演劇論や演劇観に対する研究が中心で、彼らが何を元に学んだのかを調査する研究は行われていない。本研究はその欠けた部分を埋めるものである。

そして、もう一つの日本におけるシステムの受容で最も大きな問題点が、誰一人としてスタニスラフスキーやその弟子たちからシステムを学んだ人物がいなかったという点である。アメリカの場合ではモスクワ芸術座で教育を受けた弟子が遠征公演の際にロシアに戻らずに残りシステムを伝え、中国においてもソ連から派遣された教育者が直にシステムを伝えている。しかし、日本におけるシステムの受容はスタニスラフスキーの書籍などを通じた間接的なものであった。こうした日本のシステムの受容の問題点についての研究は日本において今のところなされていない。そこで本研究では日本におけるスタニスラフスキーシステムの受容を歴史的な背景・文脈を踏まえつつ明らかにし、さらに本場であるロシアや同じくシステムを受容したアメリカなどとの比較を通じ日本のシステムの特徴や問題点を論じる。

2. 研究の目的

本研究「日本におけるスタニスラフスキーシステム受容の系譜」の目的は、ロシアの俳優であり演出家のコンスタンチン・スタニスラフスキーによって開発された俳優養成法スタニスラフスキーシステムが、歴史の中でどのような形で日本の演劇人たちに伝わり受容されたのかを研究し、システムを利用した彼らが日本の俳優養成にいかなる影響を与えたのかを明らかにすることである。

また、同じく俳優養成法としてスタニスラフスキーシステムを導入したアメリカ、イギリス、中国、メキシコなどとも比較検討を行い、日本における受容の特色や問題点についても明らかにする。

そしてスタニスラフスキーシステム自体がどのように変化を辿ったのかについて、これまで翻訳されてこなかった文献や史料の調査を行い、システムの理解をより深める契機とすることを目的としている。

3. 研究の方法

(1) 日本におけるシステムの受容を明らかにするために、システムを導入した演劇人に焦点を当てながら時代順に分析する。初期の分析対象となるのが自由劇場の小山内薫と二世市川左団次、築地小劇場における小山内薫と土方与志、水品春樹、青山杉作による導

入である。まだスタニスラフスキーの著作が出版されていない時代に、いかにスタニスラフスキーの教育方法を取り入れたのか、どのような情報を参考にしたのかを1928年の小山内の死後までの期間の分析を行う。

(2) 日本で出版されたシステムやスタニスラフスキーに関する書籍を、ロシアや英語圏などで出版された書籍などと内容を照らし合わせることで、システムの受容に日本特有の問題点があるのかを明らかにする。

(3) 日本とロシアに保管されているアーカイブの調査によって、小山内薫をはじめとした日本の演出家がシステムといかなる関係を持っていたのかを調査する。

(4) 現代のロシアやアメリカなどでシステムを元にした教育を受けた人物へのインタビューを行い、実際に行われている俳優教育のなかでシステムがどのように扱われ、発展しているのか聞き取り調査を行う。

4. 研究成果

(1) 小山内薫が日本におけるスタニスラフスキーシステム受容のスタート地点とみなされてきた研究史を更新した。

これまで築地小劇場の創始者である小山内薫が日本で最初のシステムの受容者であり、その方法を築地小劇場の演出や稽古で用いていたというのが定説とされてきた。この説に対してはこれまでも異議を唱える研究者はいたが、明確に根拠を提示できた研究は無く、実際の稽古風景などとスタニスラフスキーシステムの類似性、そして小山内本人がスタニスラフスキーと直に会ったことなどを根拠に小山内薫がシステムを知っていたのだと主張がなされてきた。

本研究では慶應義塾大学図書館に保管されている小山内薫の蔵書の調査を行い、彼がどのような書籍から演劇や演出を学んでいたのかを分析した結果、小山内が築地小劇場の稽古で用いていた方法はスタニスラフスキーから学んだものではなく、アメリカのリアリズムの演出家デヴィッド・ペラスコの著書から学んだものであることが判明した。また、小山内は様々な書籍でモスクワ芸術座については調査を行っていたが、それらにはシステムに関する言及はなく、彼がシステムを学ぶ機会がこの時点では無かったことを証明した。しかし、小山内の蔵書にはスタニスラフスキーシステムを開発していた時期に活動を共にしていたポリケンシテインの書籍が含まれていた。この書にはシステムの初期の方法が紹介されており、断片や課題などの方法を知ることが可能であった。ところがこの書はページが切られていない部分もあり、読まれた形跡が一切存在していないものであった。この書を手に入れたのは恐らく1927年にソ連に招待されたときであり、帰国

後小山内は歌舞伎のソ連公演の実現や築地小劇場の公演に多忙で読む機会がなかったのだと考えられる。そして、1928年の急死により、ポリケンシテインの書籍は読まれぬまま慶應義塾大学図書館に保管されていたのである。

この研究成果を論文として発表し、日本におけるシステムの受容の開始点が小山内薫と築地小劇場にあるのではないことを示した。

(2) スタニスラフスキーシステムの用語の世界的な混同の発見。

日本でシステムを学ぶために翻訳されたスタニスラフスキーの弟子たちや研究者による書籍の分析、および国外で出版された文献の翻訳と調査により、システムで使われている用語「ポドテクスト」(英語ではサブテクスト)において、2種類の別の意味をもつ用語が混在していることが判明した。

その2種類とはシステムの開発者であるスタニスラフスキー本人が使うものと彼以外の弟子たちが使うものである。そして、この2種類のうちシステムで使われているのはスタニスラフスキー以外が使う「ポドテクスト」なのである。この「ポドテクスト」は発話の裏にある本心を意味するもので、システムだけでなく一般的にも用いられる用語となり、スタニスラフスキー本人が使う「ポドテクスト」もこちらの意味で理解されてきたのである。

こうした状況がなぜ生じてしまったのか、その疑問に答えるため、ロシアのアーカイブの資料を調査し、スタニスラフスキーシステムが初期にどのように紹介され、そしてそのなかで「ポドテクスト」がどのように扱われてきたのかを分析した。その結果、スタニスラフスキーではなく、彼の一番弟子であるエヴゲーニー・ワフタンゴフが独自に「ポドテクスト」を別の意味で用いた可能性が極めて高いことが明らかとなった。ワフタンゴフのもとでシステムを学んだボリス・ザハーヴァとヨシフ・ラポポルトの著書にその影響が強く見られるためである。そして、「ポドテクスト」の概念が、心理学者のレフ・ヴィゴツキーによって心理学の分野にも導入されたことで、スタニスラフスキーが意図していた「ポドテクスト」ではなく、ワフタンゴフが使う意味で現在まで浸透してしまった可能性を検証した。

日本ではシステムの学習において、ザハーヴァとラポポルトの著作による影響が特に強く、そのため解説書などにおいても、やはり「ポドテクスト」を彼らが使う意味で用いられ、2つを区別することなく用いられている。これは、日本に限らずラポポルトとザハーヴァの著作が影響力を持った英語圏においても中国においても同様である。

そのため、システムを正確に理解するためには2種類の「ポドテクスト」が存在してい

ることを理解し、特にスタニスラフスキーが使用している「ポドテキスト」を区別して彼の言葉や著作を読解しなければならないのである。これらの研究成果は論文として発表し、システムの理解をより進めることが可能となった。

(3) 現在のシステムを使った教育方法についてインタビューによる聞き取り調査。

スタニスラフスキーシステムを用いた俳優教育は、彼の著作『俳優の仕事』を元に方法を学ぶ以外に、彼から直にシステムを教えられた弟子たちが、その方法を自分自身が教師として教えることによって各演劇大学の授業などに代々受け継がれていった。スタニスラフスキーは時期によってシステムを発展および改良しており、教えを受けた学生もその時期によって学んだことが異なっている。こうした演劇大学などの教育機関で受け継がれているシステムの方法を知るために、実際にロシアの演劇大学などで学んだ人々へのインタビューを実施した。

これにより、スタニスラフスキーが著作で解説したシステムの概要と、実際に教育の現場でシステムとして教えられていることのあいだにある違いを知ることが可能となった。この調査については今後も継続し、これまでの成果を踏まえたうえで、システムがどのように今の演劇教育に影響を与えているのか、明らかにしていきたい。

(4) 未邦訳の文献調査および翻訳による、初期のスタニスラフスキーシステムの発展段階の分析。

ロシアのアーカイブの調査で発見したこれまで未邦訳であった書籍や雑誌記事の翻訳を通して、スタニスラフスキー以外の人物がどのようにシステムを語ってきたのかについて明らかにすることができた。これらの翻訳は、(1)と(2)の論文における重要な資料として活用することができた。

また、これらの成果は一般公開の形式で研究会および読書会を行い、俳優を含めた研究者以外の一般の人々にも広く成果を公開することに努めた。

(5) ロシアにおける小山内薫の講演記録の翻訳、および全集に未収録であった日本の雑誌記事の公開。

1927年の革命十周年記念でソ連に招かれた小山内薫は、メイエルホリド劇場で講演を行っていた。その際の記録がアーカイブに保管されており、その全文を公開した。この小山内の講演については、同じくソ連に招かれた秋田雨雀によって言及されてきたが、その内容と秋田による言及には少なからず差異があり、これまでも秋田の発言は先行研究において信憑性が疑われてきたが、記録の発見によって、秋田の証言には事実と異なる点があることがはっきりさせることができた。

また、早稲田大学の図書館の調査により、ソ連滞在時の印象を小山内自身が語っている記事を発見することができた。この記事は全集に収録されておらず、小山内薫研究においても新たな発見である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4件)

内田健介、スタニスラフスキーシステムにおける2つのポドテキスト、ロシア語ロシア文学研究、査読有、49巻、2018、印刷中。

内田健介、川島健著『演出家の誕生：演劇の近代とその変遷』(2016年) 千葉大学人文社会科学研究、査読無、33巻、2016、pp124-132、<http://opac.ll.chiba-u.jp/da/curator/100549/>

内田健介、メイエルホリド劇場での小山内薫の講演記録(1927年) 査読無、千葉大学人文社会科学研究、2015、pp217-222、<http://opac.ll.chiba-u.jp/da/curator/900118593/>

内田健介、日本におけるスタニスラフスキー・システム受容の系譜(1) 小山内薫はスタニスラフスキー・システムの受容者だったのか?、千葉大学人文社会科学研究科プロジェクト報告書「文学と歴史 表象と語り」、査読無、289巻、2015、pp5-20p、<http://opac.ll.chiba-u.jp/da/curator/101002/>

[学会発表](計 2件)

内田健介、スタニスラフスキーのポドテキスト、日本ロシア文学会、2016年10月22日、北海道大学(北海道・札幌市)

内田健介、小山内薫はスタニスラフスキー・システムの受容者だったのか?、日本ロシア文学会、2015年11月8日、埼玉大学(埼玉県・さいたま市)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

内田 健介 (UCHIDA, Kensuke)
千葉大学・人文社会科学研究科・特任研究員
研究者番号：80706911

(4) 研究協力者

鈴木 直子 (SUZUKI, Naoko)
猿渡 彩乃 (SAWATARI, Ayano)
岡本 佳美 (OKAMOTO, Yoshimi)
守輪 咲良 (MORIWA, Sakura)
丸知 亜矢 (MARUCHI, Aya)